

アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



ハイム・スーチン（一八九四―一九四三）
〈カーニユ風景〉
一九三三年
キャンヴァス、油彩
六〇×七二・四cm

一九二二年の暮れ、スーチンの作品は、アメリカの富豪アルバート・バーンスの目に留まる。故郷リトアニアを離れパリで貧困に喘いだ二〇代が終わる頃、ようやく手にした名声だった。その動揺をさけるように訪れた南仏にて、カーニユ北部の集落ラ・ゴードの風景を描いたのが本作である。

左右の家屋や大木が外側へと湾曲しつつ前へとせり出してくるように見える一方、中央に積み上がった家々はぐっと奥へと引っ込んで、魚眼レンズでぐるぐると見回したような酩酊感がある。ゆらゆらと崩壊しそうな画面を、中央の青い服の人物が、錨のように繋ぎ止める。

同地を描いた作品は九点を数える。スーチンは、「この風景にはもはや耐えられない」とこぼしながらも、連作に取り組んだ。

（主任学芸員 貴家映子）

No.
142
2021年度 | 夏 |

コレクションについて館長が知らなかったこと

館長 木下直之

前号に「コレクションについて館長が知っていること」を書いたら、次は「コレクションについて館長が知らなかったこと」を書くしかない、と考えるのが私の習性です。しかし、知っていないことなどほんのわずか、知らないことの方がはるかに多いのですから長期連載になってしまうかもしれません。

当館には小杉文庫と呼ばれる三四七件から成る古文書群があります。これがコレクション第一号であると知った時ほど驚いたことはありません。そんなことも知らずに館長になったのかと、もっと驚いた読者がいるかもしれません。

小杉文庫にはもともと正倉院にあつたとされる奈良時代の古文書が含まれ、とりわけ「天平勝宝四年東大寺写経所請経文」、「天平四年山背国愛宕郡計帳断簡」、「後嵯峨上皇幸西園寺詠詠花和歌」の三件は国の重要文化財に指定されています。

風景の美術館、ロダンの美術館、狩野派の美術館、サブカルチャーの美術館（プラモデルの箱絵、ロボット、美少女

のフィギュア、機動戦士ガンダムなどに光を当ててきた実績あり）を自認してきた当館にとって、これほど似つかわしくないコレクションはありません。

当館では一九八八年に『小杉文庫名品抄』を刊行し、その概要を公表しています。小杉楓邨すきむらという明治時代の国学者の旧蔵品が四散した後、一部が森町の藤江家に伝わっていたものです。いずれも貴重な歴史資料であることはいうまでもありませんが、なぜこれが最初の収蔵品であったのが私の驚きであり、また関心事です。ついでにいえば、なぜ正倉院文書が小杉の手に渡ったのかも興味深い問題です。

この本に先立って、一九八一年には静岡県教育委員会が『藤江家旧蔵小杉文庫目録』を刊行し、三月二八日付の「序」で、当時の教育長が重要文化財指定品に二件を加えた計五件を、「昭和五十九年開館を目指して設立準備中の静岡県立美術館の収蔵品として、すでに県が購入」したと述べています。さらに、同家より三四二件を寄贈いただきました。

ところで、美術館は美術館の誤りではないかと思われる読者もいるかもしれません。開館の五年前、すなわち八一年の時点で、静岡県が建設を目指していたのは県立美術館だったのです。すでに前年四月に県立美術館建設準備室が設置され、九月に「県立美術館資料収集方針」が、翌八一年五月に「県立美術館資料収集計画」が決定していました。それが八二年九月になって突然、「県立美術館博物館」から「博物」の二文字が外されたのです。

もしも外されなければ、当館の三十五年の歴史はまったく違うものになっていたでしょう。

私は、若いころに美術館と博物館の間に横たわる溝が気になり出し、兵庫県立近代美術館から東京大学総合研究博物館へと転職した経歴の持ち主です。博物館が美術館よりもより間口が広いと期待しました。美術館は美術品しか相手にせず窮屈だと感じていたのです。しかし、両者の溝が越え難くある限り、逆に博物館は美術品を扱わな

いから窮屈だ、という理屈も成り立ちます。頭の中で、両者をいったんシャッフルすることが大切ではないのか。

当時、それを意識した議論が行われたわけではないようです。「県立美術館資料収集方針」では、「収集する資料は、美術・考古・歴史・民俗部門の資料」としており、いわば既存の美術館と博物館を合体しただけの発想です。そこから「博物」の二文字が外れたのは、もっと現実的な問題、要するにお金が足らなかつたようです。いくら開館までに二七億円の購入予算（静岡県立美術館蔵品目録 一九八六年版）があつたからといって、古文書購入に七千万円（『日本教育新聞』静岡版一九八一年八月十日付が指摘）を投じてしまえば、全部門をカバーするのは困難であつたでしょう。こうして、小杉文庫の古文書は歴史部門ではなく、美術部門の中の「書」に位置づけられました。

先の「収集方針」はこう続けます。「当面第一段階は美術部門を中心として収集」する。「当面」とはいつまでのことだったのか、静岡県は県立博物館を持たずに今日に至っています。

頁の隅がだんだん近づいて来ました。やっぱり長期連載になってしまうのでしょうか。当館は今年開館三十五周年を迎えたのですから、もうしばらく誕生のころに目を向けようと思います。

ガンダーラ展の思い出と誇り

常葉大学教育学部教授、常葉ギャラリー館長 堀切 正人

私にとって思い出に残る仕事をあえて一つだけ挙げるなら、平成十九年度に開催された「ガンダーラ美術とバミヤン遺跡」展でしょうか。この展覧会は国内にあるガンダーラ美術の名品を一堂に集め、さらにバミヤン遺跡や大谷探検隊の資料も展覧する、まさに空前絶後のものでした。企画したのは、当時の宮治昭館長です。先生の長年の調査、研究による深い学識と広い人脈、そしてそのお人柄が、この大展覧会を作り上げたのでした。私はこの展覧会の担当学芸員でした

が、その重責をとっても担いきれず青息吐息でした。見かねた学芸部長の号令一下、同僚の学芸員諸氏が仕事を手伝ってくれたのは温かい思い出です。押し寄せる来館者（ありがたいことです）対応など、副館長と総務課の皆さん、ミュージズスタッフ、警備、施設管理、ボランティアさんたちほか、館スタッフの総力をあげて乗り切りました。立場や考え方の違いはあっても当然ですが、いざとなったら力を合わせる。静岡県立美術館の底力なのでしょう。



「ガンダーラ美術とバミヤン遺跡」展チラシ



開会式風景

評判は高く、よく耳にしたのは「なぜ静岡（のような大都市）でこんな展覧会ができるのだ」とか、「東京には巡回しないのか」といった声でした。共催いただいた新聞社についても「全国紙でもない地方紙が、よくこれだけの企画を打てるものだ」という畏怖にも似た感想を聞きました。全国レベルの企画は、東京などの大都市発で、地方はそのお下がり頂戴するのだという偏見や劣等感があるとすれば、それは残念なことだと思います。地域を問わず、あるいは規模の大小に関わらず、そこだからこそできる企画や活動というものはあっても、地方の人が大都市へ見に行くように、大都市の人が地方へ見に来ることも、もって普通にあっていることだと思えます。東京の人がうらやむような企画に関わらせていただいたことは、私にとってもささやかな誇りとなりました。

もつとも、このような企画をなしえたということは、驚くほどのことでもないのです。静岡県立美術館の歴史を振り返って見たときに、静岡から全国へ、そして世界へ発信された企画や活動の、なんと多いことか。展覧会活動だけではありません。収集、教育普及、調査、研究など、全国の魁として輝いているのが、この美術館なのです。新型コロナウイルス禍にあっても、来館者数といった定量的な評価は従来の意味を失うでしょう。代わってその質、定性的な評価がより重視されると思います。たとえるなら、静岡県民のすべてが富士山に登るわけではありません。でも富士山は県民の誇りにちがいありません。文化施設も同じで、利用する人もいれば、しない人もいます。でも、少ない人でも、それはあつてよいと思う人は多いと思います。誇らしい施設であれば、なおそうでしょう。県の施設は、利用率だけではなく、そうした県民の誇りを負託されているのだとも思うのです。静岡県立美術館がこれからもますますそうであることを、私は信じて疑いません。

堀切正人（ほりぎり まさひと）

平成十三年三月から二十四年三月まで、静岡県立美術館に学芸員として勤務。現在、常葉大学教育学部教授、常葉ギャラリー館長。著作に『宮芳平自伝』（編、注、『石田徹也ノート』（企画、共著）、『ロダン体操』（監修）など。

国立ベルリン・エジプト博物館所蔵 古代エジプト展 天地創造の神話

2021年7月10日(土)～9月5日(日)

これまでに当館では、「国立カイロ博物館所蔵 古代エジプト文明展」(二〇〇一年)、「トリノ・エジプト展」(二〇〇一年)、「黄金のファラオと大ピラミッド展」(二〇一七年)と、古代エジプトについての展覧会を皆さんにご覧頂いてきました。

それらは本国エジプトのカイロや、イタリアのトリノなど、いずれも名立たるコレクションからの作品

でした。今年はこちらに、ドイツのベルリン国立博物館群エジプト博物館からの作品が加わることになりました。

ベルリン博物館群は、先史時代からエジプト、ギリシャ、ローマ、十九世紀絵画、そして現代にいたるまで六千年にわたるコレクションを擁する、世界的な規模と質を誇る博物館群です。本展ではその中の一つ、エジプト博物館から、約一三〇点の作品を選りすぐってお届けします。

これまでのエジプト展では、古代エジプト文物の総合的な紹介、あるいはピラミッドという唯一現存する世界の七不思議に焦点を当ててきましたが、今回の展覧会では、古代エジプト人達の抱いていた死生観や世界観といった、いわば目に見えない部分を、今日残る作品群を通して、感じて頂こうと思えます。

古代エジプト人達は、原初の海「ヌン」から世界は生まれ、そして終末の日に再び世界は飲み込まれるのだと信じていました。その巨大な流れの中に、神々の役割や人々の生活は位置付けられていたのです。

古代エジプトの神々は、ただ混沌とした暗闇しかない状態から、世界

を、生命を、人間を創造したと考えられていました。そしてそれらを支える正しい秩序、摂理は、マアトと呼ばれました。

このマアトに従い、様々な形で世界を支えていたのも、数多くの姿で描かれる神々です。山犬の頭を持つ死者の神アヌビス、冥界の王オシリス、雌猫の姿で表されるバステト等、皆さんの中にも、これまでにどこかでご覧になった方もあるかと思えます。

人間社会のリーダーであるファラオもまた、このマアトを守る者としての役割を担っていました。だからこそ、異民族の侵入や謀反のような、マアトを揺るがすような事件に対しては、断固たる態度で臨んだのです。そしてマアトの中で人間は、短い一生を終えると、アヌビスに導かれ、死者の審判を受けることになっていました。心臓を天秤にかけられ、マ



《バステトのミイラ・マスク》
後50～後100年頃



《バステト女神座像》
前610～前595年頃
作品画像は全て ©Staatliche Museen zu Berlin, Ägyptisches Museum und Papyrussammlung / M. Büsing

アトを象徴する羽根と釣り合うかを見るときこの試練を乗り越え、幸福な来世へと向かうために、死者が参照するのだとされたのが、「死者の書」です。

今回の展示では、こういった古代エジプトの世界観をより分かり易く見て頂くために、特別なアニメーションをご用意しました。そこで皆さんをご案内する展覧会キャラクター「アヌビス」の声と動きを担当して下さったのは、ご存じ荒牧慶彦さんです。

コロナ禍のせいで、出歩くこともままありませんが、せめてひと時、古代エジプトの不思議な世界へ、心を遊ばせて下さい。

なお、この展覧会では、事前整理券(日時指定QRコード)に従ってご入場頂きます。整理券のご予約は、当館ウェブサイトからお願いたします。

(上席学芸員 新田建史)

構図をめぐって 縦に積む/横に拡げる/奥に進む

2021年6月29日(火)～9月5日(日)

——「構図」とはなんでしょ？

今回の展示では「構図」描かれる対象を画面上で組み合わせて特定の効果を上げるやり方」と位置づけています。もちろん「構図」に対する考えは画家それぞれに独自のものがあるでしょうし、絵画に限ったものでもない。写真、映画、アニメ、マンガ、イラスト、広告デザイン、工芸、衣服、工業製品といったものにも構図の考え方はあるでしょう。ですが、ひとまず本展では最初に挙げたような定義から日本の洋画作品を検討・紹介しています。

——絵画の「構図」のパターンはいく

つかある。それらをまとめて紹介しますよ、という話ですか？

ですね。ここ数年の当館日本洋画収蔵品展では海や山といったモチーフに注目したり、時代や流派でくくったりしたりして作品を紹介することが多かったのですが、今回は趣向を変えて、造形的な要素でグループングしてみようかと。

——「考えるな、感じろ。」ということですね。

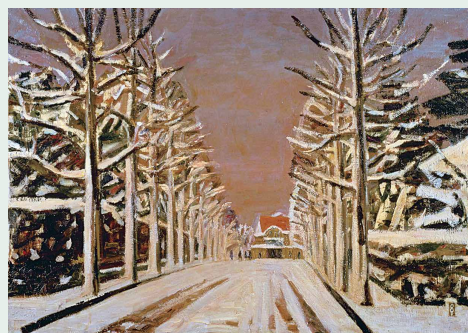
あ、そういうことではないです。「自由に感じるままに観てください」っていわれてもフツー困るじゃないですか、あまりにもとっかかりがなくて。そこで今回はとりあえずモチーフの配置が生み出す「動き」の感覚に注目してみることになりました。そしてそのことは画題、画家の画業、描かれた時代の状況などとともに絵を味わう手がかりのひとつとなるでしょう。なので、検討して考えることを排除しません。

——（なんだか理屈っぽくなってきたな……）えーと、例えば？

例えば小糸源太郎の《春雪》という作品を見てください。ぱっと見かなり特徴的ですよ。

——雪の積もった並木が真ん中奥の駅舎に向かって左右からぐっと集まっていく感じ……。

そう。見通しが良く距離感が強調さ



小糸源太郎《春雪》昭和28（1953）年 キャンヴァス、油彩

れた構図を用いているので、視線は一気に画面の奥へと導かれます。いかにも重たそうな春の雪景とシンプルな構図が互いに補い合っている。

——なるほど。この情景で構図が複雑だったら重たすぎていやになりそうだし、この構図でたっぷりした雪がなかったらがらんと寂しいでしょうね。それに対し、田村一男の《北越大雪》は同じ雪景でもずいぶん絵作りが違っています。そもそも画面の縦横からして違いますし。

——うわ、サンガラスがないと目がくらみそうな絵……あ、でもこちらの絵にも奥へと導かれる感覚、ありますね。

ええ。北越の山岳地帯を高い位置から俯瞰的に、ドローンのとでもいうような視点から描いてますよね。微妙な階調の白を画面全体にほってりと置い



田村一男《北越大雪》昭和51（1976）年 キャンヴァス、油彩

ているので、第一印象ではハレーションを起こしたようなまぶしさがあるかもしれない。けれども、じっくり見ていると、画面下部に開けた場所があつて民家の屋根に雪が積もっているのに気づくでしょう。そこに視線の足がかりを築くことができれば、あとは折り重なった山裾の間をどんどん分け入りつつ絵の中を昇っていく感覚が自然に得られる。

——なるほど。カットと目を見開いて一望の下に全体を把握するのではなく、ジワジワと登山するように見ていく感じ。冬山はほんらいとても厳しい場所ですが、この絵の世界では山懐に分け入って、さらに分け入って、抱かれるような暖かみがあります。それはたぶんある程度の時間を掛けて視線を動かすことを要求する画面設計がもたらす感覚であり、絵の意味なのではないかと。こんな感じで絵を見てもらう一つの手がかりを示せばと考えています。

（上席学芸員 村上敬）

白髪一雄 《屋島》 について

上席学芸員 植松 篤

白髪一雄（一九二四―二〇〇八）は、ロブにつかまり、画面上を滑るようにして足で描いた絵画や、現在ならばパフォーマンスと呼称されるような作品などによって知られている。白髪が足で描く様子を写した写真は、これまで様々な記事やカタログなどで掲載され、定着された作家像と言えらる。しかしながら、白髪はそのような制作方法しか採用しなかったわけではない。彼は一九六〇年代半ばから一九七〇年代後半にかけて、オーソドックスに絵筆を使用したのではないが、道具を用いて描いた絵画も手がけている。当館の所蔵する《屋島》（図1）もそうした作品の一つである。本稿では白髪の画業における《屋島》の位置づけを探りたい。

まずは基本的な情報を押さえておきたい。《屋島》は一九六五年作の絵画で、キャンバスに油彩で描かれている。画面左にヘラで描いた大きな扇状の形が見られるのが特徴で、その他の部分にも道具を用いている箇所や足で描いたと考えられる箇所がある。実際、画面右下には作者の足跡が残っている。作品のサイズは、規格で言えばFサイズの一五〇号（実測では一八二・〇×二二七・〇cm）である。白髪は、それまで大作だと二〇〇号に近いものを多用しており、より小さいサイズでは一〇〇号や一二〇号等が多かった。もちろんそれ以外のサイズの作品も存在しているが、F一五〇号はこの頃より採用されることが多くなった。

次に、道具を使って描く作品の変遷を簡潔に辿りたい。現在確認できる限りでは、足で描くフット・ペインティングの確立以降、白髪が道具を使い出したのは、一九六四年のことのようだ²。もともと、それ以前に、すでに手を利用したり、絵具を撒いたりといった方法が制作に取り入れられていた。そうした足だけに限らない制作を経て、道具の使用に至っている³。白髪自身の言葉を参照すると、一九六五年制作の《丹赤》（福岡市美術館蔵）が、道具を使い出した最初のように述べている場合もあるが⁴、クロノロジカルに捉えるなら、前年に試みていた方法を本格的に展開させたのが、《丹赤》からだ⁵と考えるのが妥当であろう。《丹赤》は、白髪によると「大きなタッチ」で描くため、スキー板のようなものを足に着けて描いたという⁶。白髪は、それまで足で描く際には、行為の偶然性を利用していたが、本作は構想通りに制作されたようだ⁶。

この作品のすぐ後に、白髪が「ワイパー」や「フラッグ（マープル）」と呼ぶ作品群が続く⁷。「ワイパー」はヘラをワイパーのように動かして半円や扇の形を描いた作品群で、「フラッグ」は複数色をヘラで伸ばし、マープル状の色面を描いた作品群である⁸。付け加えるなら、この呼称はあくまで制作方法に関連してつけられたものであり、白髪が展開した、主題などに基づく「シリーズ」とは異なる。《屋島》は、画面左に見える扇の形から、「ワイパー」に属すると

考えられる。なお、当初、白髪は円を描くことを企図したが実現せず、半円や扇の形等を描いた「ワイパー」作品を制作した。その後、白髪は一九七〇年代に円を描くことに再度挑戦し、今度は自身が納得できる円を描くことができた。この作品群が「密教シリーズ」と題する作品群の一角を占めている。道具が使用された作品群の概略は以上である。

さて、《屋島》に話を戻し、制作のプロセスを画面の痕跡から推測すると、少なくとも、大まかに三つの段階を見て取ることができる。すなわち、第一段階では、ヘラを使用し、右上部を茶、黒などで描き、右中央部を黒、黄などで描いている。その際、節のような段がつけられている。第二段階では、足に切り替え、左上部と右下部を朱、黄などで弧の形を描き、右上部から下部に

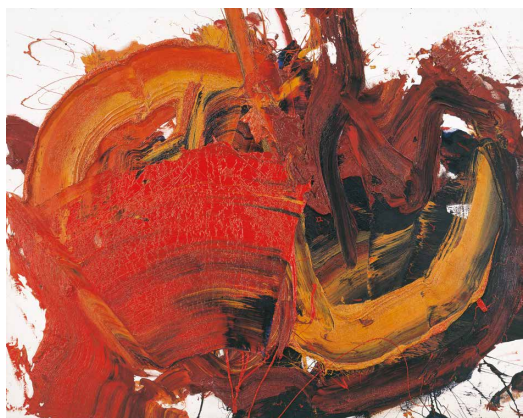


図1 白髪一雄《屋島》1966年 静岡県立美術館蔵



図2 部分

かけて、茶などで回り込むようなストーリーを描いている。第三段階では、ヘラを左側に画面四分の一近くを占める大きな扇の形を描いている。これ以外にも描画が施されているが、上記に挙げたものの背後に隠れ、プロセスを辿ることは困難だ。また、初期には青色を使用していることが分かるが、完成作にはほとんど反映されていない(図2)。そうしたことから、本作について言えば、構想通りに描かれたのでは無く、偶然性も一定程度含まれているのではないだろうか。言い換えれば、制作前には、詳細な完成イメージは作家の中に存在しなかったと言える。そして、事後的に「屋島」とタイトルが付けられた。白髪は、「画面に扇の形が出ていることから『平家物語』・那須与一を連想して『屋島』とした」と述

べている。

本作はシリーズとしては「合戦絵シリーズ」に含まれている。白髪の言葉に従えば、絵を読み解くために、歴史的なエピソードを参照するには当たらないかもしれないが、ヘラの使用や足の使用などの観点から、このシリーズを考察することは可能だろう。

本作品が始めて出品されたのは、管見の限り「第二回ジャパン・アート・フェスティバル」¹⁰である。一九六六から一九七七年まで続いた展覧会で、注目されることは少ないが、日本の芸術作品を国外で大規模に披露するという点では、稀少な機会であった。白髪は第一回展と第二回展に出品している。第二回展には《屋島》の他、《俱利伽羅》(福岡市美術館蔵)、《宇治》を出品した。《宇治》の詳細は不明だが、《俱利伽羅》もヘラと足の両方が用いられた作品である。

《屋島》は「合戦絵シリーズ」の初期の作品であり、また大規模展に出品されたことを考えると、一九六〇年代中頃から始まる作風の変遷において、重要な作品の一つと言えるだろう。ヘラによる面の動きと、足を使った激しいストロークが両立した本作の特徴は、その他の「合戦絵シリーズ」や「密教シリーズ」にも引き継がれるものである。

1 東京オペラシティアートギャラリーで開催された個展では、これらの作品群に「スキー・ベインティング」の名称が与えられている(福士理「スキー・ベインティングと制作の変容」『白髪 Kazuo Shiraga: a retrospective』公益財団法人東京オペラシティ文化財団、二〇二〇年、六

三頁。

2 一九六四年の作例としては、下記の四点が確認できる。《天勇星大刀》(栃木県立美術館蔵)、《天機星智多星》(目黒区美術館蔵)、《無題》(国立国際美術館蔵)、《無題》(尼崎市教育委員会(尼崎市立竹谷小学校)蔵)。

3 道具の使用までの変遷については、出原均の論が詳しい(出原均「白髪一雄のフット・ベインティングの変遷」1987、1992)『兵庫県立美術館紀要』第六号、兵庫県立美術館、二〇二二年、三〇―四一頁。

4 講演の書き起こし資料(財団法人尼崎市総合文化センター寄託資料)を参照した(場所・ギャラリー・アライ(甲子園)、日時:一九九七年七月六日一四・〇一―一五・三〇)。

5 白髪一雄、小泉康夫(聞き手)「Big Interview 白髪一雄(画家)」『オール関西、オール関西』一九八九年三月、二二頁。

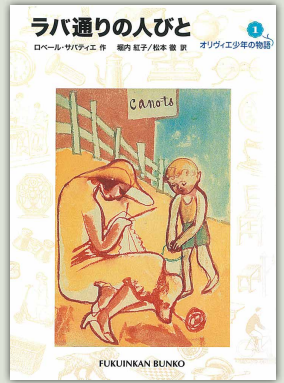
6 白髪一雄、尾崎信一郎・山村徳太郎(聞き手)「白髪一雄氏インタビュー」『具体資料集』ドキュメント具体1987-1992、芦屋市文化振興財団、一九九三年、三八―三九頁。

7 前掲註4

8 「フラック(マープル)」に該当する作品として「観音普陀落浄土」(アーツイン美術館蔵)、《東方浄瑠璃世界》(兵庫県立美術館蔵)が上げられる。なお、この二作品は「密教シリーズ」に含まれる。

9 白髪一雄(談)「表紙」『プロムナード』第二二号、静岡県立美術館友の会、一九九〇年夏、一頁。なお、同号にはインタビュー記事が掲載されている(白髪一雄「談」『アートリエ訪問 アクション・ベインター 白髪一雄』四、五頁)。

10 超党派の議員達による構想に始まる、官民参加による「国際見本市協会」が主催するもので、通産省の補助を受けていた。同時代的ないわゆる美術と、工芸などが同時に展示され、作品の販売もされた。評価は賛否あったが、大がかりな展覧会であり、人気はあったようだ。一九六五年に第一回展がひらかれ、一九七七年の第二回展まで続いた(光山清子「第2章 ジャパン・アート・フェスティバル展―一九六六―七六年」『海外を渡る日本現代美術―欧米における展覧会史1945―95―』勁草書房、二〇〇九年、八三―二九頁)。第一回展のカタログの挨拶文によると、時代を反映して、この事業には文化交流による相互理解が平和に繋がるとの意図が込められていた(NAGANO Shigeo, Greetings, The 2nd Japan Art Festival, Japan Art Festival Association, Inc., Tokyo, 1967, p.4)。



本の窓
ロベール・サバティエ作
堀内紅子/松本徹訳
オリヴィエ少年の物語一
『ラバ通りの人びと』
福音館書店 二〇〇五年

一九六九年にフランスで発表されベストセラーとなった、作者の半自伝的小説。孤児オリヴィエが、下町の個性豊かな人々との交流を通じて、母を亡くした喪失から徐々に回復、成長していく物語です。

この小説の重要な隠し味となっているのは、随所に織り込まれた多数の固有名詞でしょう。ユトリロが描いたカフェ「ラバン・アジュール」や、往年の歌手に俳優たち、「シヨコラ・ムーニエ」などの名作ポスター、いまでは使われない生活用品などが次々と登場し、異国情緒と懐かしさを同時に感じさせてくれます。

児童書ながら大人のためのおとぎ話といった趣で、ページをめくれば一九三〇年代のパリを旅する気分。遠方への旅行が憚られる今、特におすすしめしたい一冊です。

(主任学芸員 貴家映子)

作品にこめられた想い

副館長 伏見光博

この四月に副館長に着任いたしました。毎日プロムナードの彫刻群を歩いて通り、館内の素晴らしい美術作品に囲まれ、今までの県庁生活とは異なる環境の中、美術「感」を磨き新たな気持ちで頑張っております。

一昨年、海外学生の県内留学促進のため、ベトナムのホーチミン、ハノイに出張しました。ベトナムは古くは中国の支配を受け、十九世紀後半にフランス植民地となり、その後ベトナム戦争の影響もあり、南部ホーチミンは経済都市、西洋文化、北部ハノイは政治都市、中国文化を感じる街でした。平均年齢が三十歳程度と非常に若く活気があり、道路ではバイクが溢れ激流の川のように走っていました。

ベトナムの工芸作品である「バッチャン焼き」は、中国の陶磁器に影響を受けたと



バッチャン焼き

いわれ、素朴な乳白色の器に描かれた繊細なモチーフが特徴です。産地であるバッチャン部落では、十五世紀から十七世紀に中国への貢物、海洋貿易、宗教祭事の用具などで盛んになったといわれ、十九世紀後半にフランス植民地体制下では輸出ができず低迷が続いたようですが、二〇世紀中頃に社会主義経済体制になると再び盛んになったとのことです。

歴史とともにバッチャン焼きの制作にも影響があったと考えられます。日本では、安土桃山時代に紹介され、茶人の間で珍重されたとのことです。現地でも作品に魅了された日本人が制作に関わるなど共感されており、私も現地で購入した優しい色合いの蓮が描かれたコーヒーカップを今も職場で愛用しています。

美術館に勤務して改めて感じたことは、作品の制作者がどの時代に生きてその時が起こっていたのか、それが作品にどう影響しているのかなど、背景を知ることにより深く観ることが出来ます。作品に描かれている想いは学芸員の深い研究によって来館者の皆様に伝えられます。是非これからの企画展を楽しみにしていきたいと思っております。

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡I.C.、清水I.C.から約25分 日本平久能山スマートI.C.から約15分
- ◎新東名高速道路 新静岡I.C.から約25分

ウェブサイト：<http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館

Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

休館のお知らせ

9月6日(月)～令和4年3月31日(木)まで改修工事のため休館

移動美術展のお知らせ

静岡県立美術館 超名品展 風景と人間

会場
浜松市美術館

会期
11月13日(土)～12月19日(日)

今年の移動美術展は開館35周年記念の特別版。館長・木下直之が監修を務め、当館コレクションからとびきりの名品を選びすぐり、浜松でお目にかけます。ここでしか見られないぜいたくな超名品展、ご期待ください。

友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。